

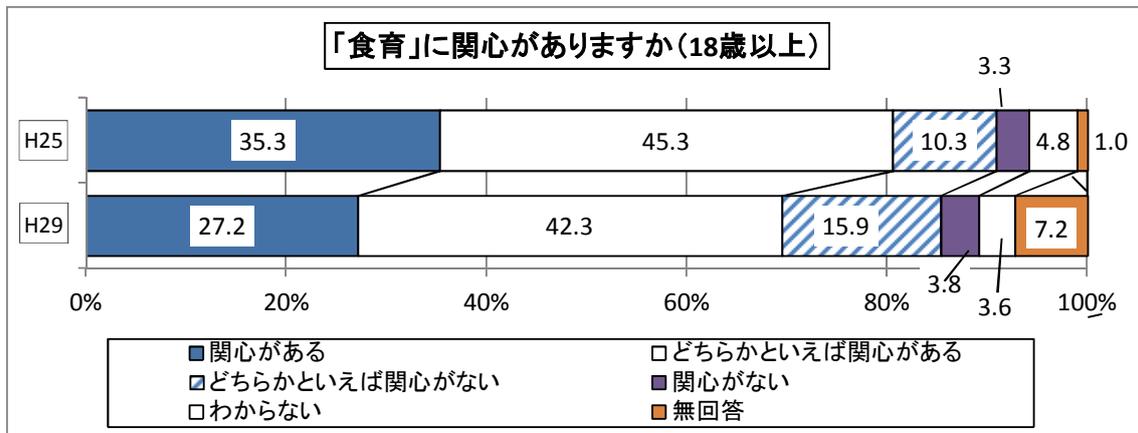
第3章 第二次かごしま市食育推進計画における評価

第二次計画では、基本理念「食を通じて、健康で生き生きと生活できる活力あるかごしま市の実現」を達成するために、5つの基本目標を掲げ食育の推進に取り組んできました。

1. 目標項目に対する評価

(1) 基本目標1：「食」で健康な心身をつくろう

① 食育に関心を持っている人の割合の増加

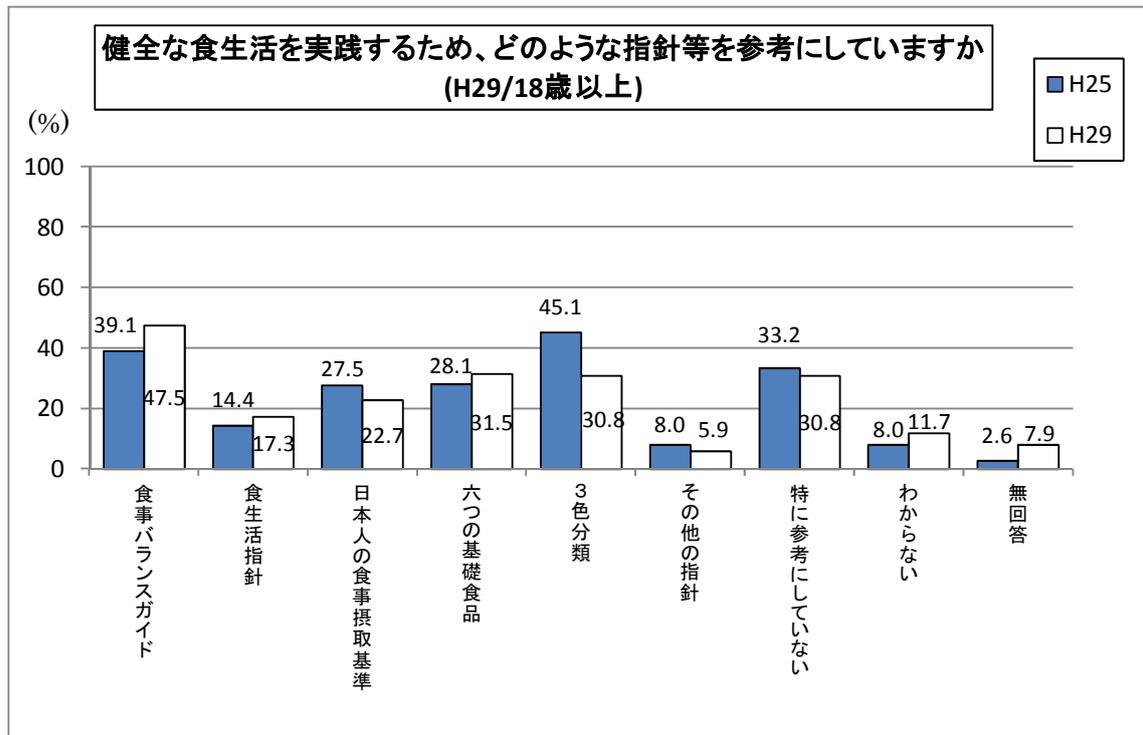


平成29年度調査(以下「29年度」という。)は69.5%で、25年度の80.6%と比較すると減少しています。

「食育」とは様々な経験を通じて、食に関する知識と食を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てることであり、あらゆる世代の国民に必要なものであると位置づけられています。

今後は、幅広い世代が関心を持てるように、あらためて言葉や概念の普及に努めていく必要があります。

②「食事バランスガイド※①」等を参考に食生活を送っている人の割合の増加



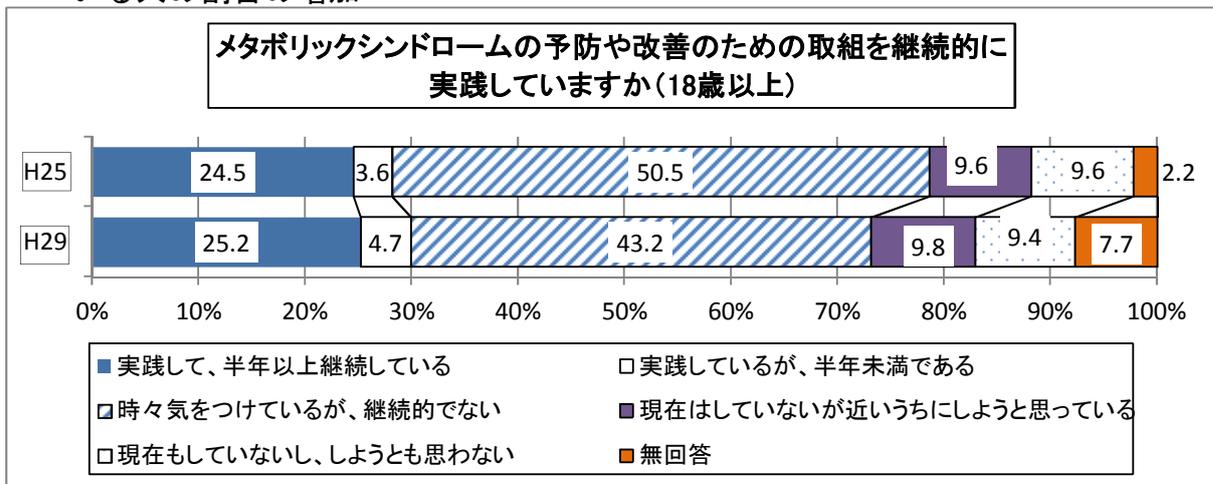
29年度は49.6%で、25年度の56.2%と比較すると減少しています。※②

バランスガイドをはじめとする様々な指針がありますが、今後は、これらの指針等を広めるとともに、さらに、実生活に取り入れやすく分かりやすい方法を広めていく必要があります。

※①食事バランスガイド：1日に、「何を」、「どれだけ」食べたらよいか、食事の望ましい組み合わせとおおよその量をイラストでわかりやすく示したもの。平成17年6月に厚生労働省と農林水産省が決定した。

※②数値について：食生活を送る上で、指針等をひとつでも参考にしていると回答した人の割合。

③メタボリックシンドローム※③の予防や改善のための取組を継続して行っている人の割合の増加



29年度は25.2%で、25年度の24.5%と比較すると微増しています。

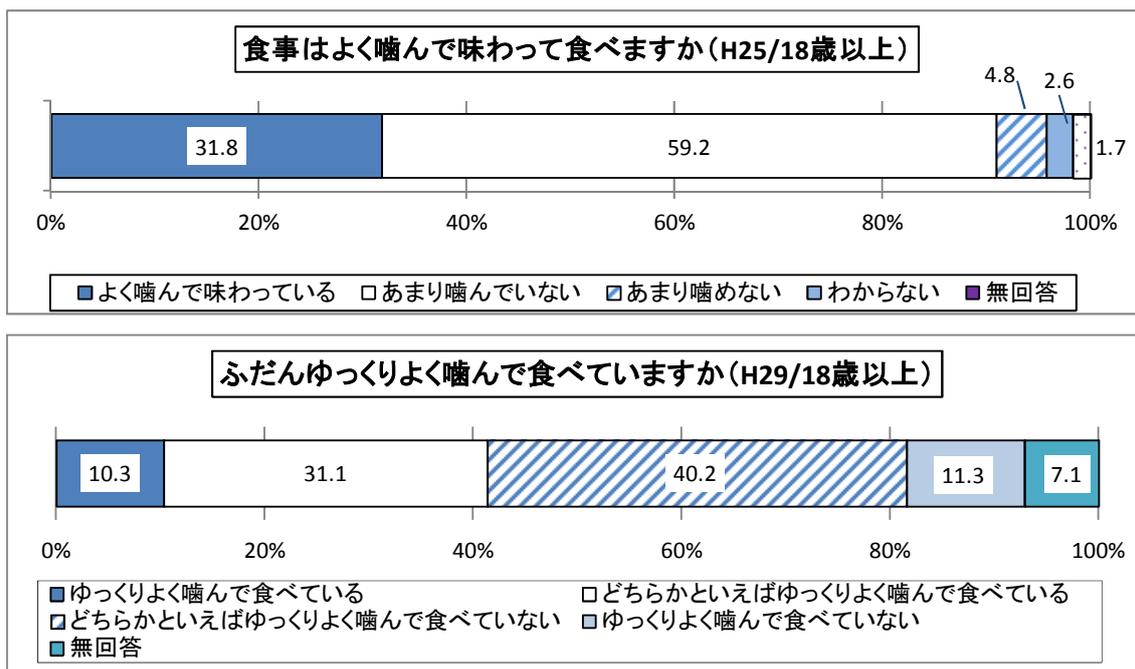
一方、女性及び若い世代では「やせ」の人の割合が「肥満」の人の割合を上回っている状況です。(「かごしま市民すこやかプラン※④中間評価のためのアンケート調査集計分析報告書」より)

今後は、メタボリックシンドロームだけでなく、やせを含め、世代に応じた生活習慣病全般の予防・改善に向けた取組を啓発していく必要があります。

※③メタボリックシンドローム：おなかの内臓まわりに脂肪が蓄積した内臓脂肪型肥満に加えて、高血糖、高血圧、脂質異常のうちいずれか2つ以上をあわせ持った状態。

※④かごしま市民すこやかプラン：平成25年～34年度を計画期間とする、本市の健康増進計画。
平成28年度に実施した中間評価のためのアンケート調査によると、20～59歳の女性では肥満14.1%に対し、やせ14.7%となっており、また、20～24歳の男女では肥満5.8%に対し、やせ21.2%となっている。

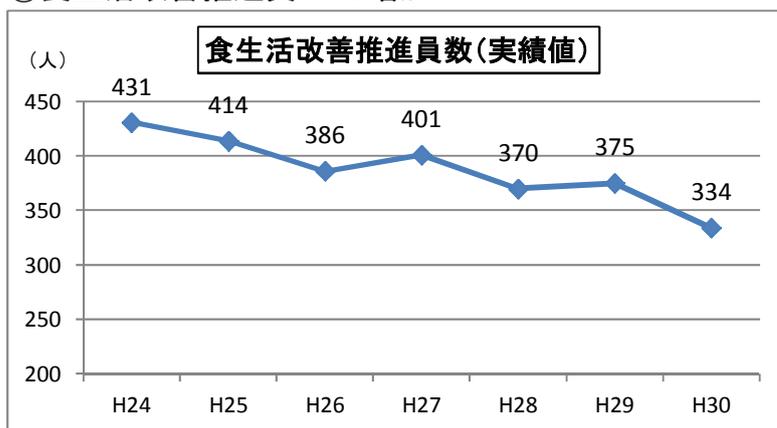
④食事をよく噛んで味わって食べる人の割合の増加



29年度は41.4%で、25年度の31.8%と比較すると、増加し、目標を達成しています。

「口」からとり込まれた食物を十分に咀嚼して食べることは快適な食生活を送る上での基本である（「歯科保健と食育のあり方に関する検討会報告書※⑤」より）ため、今後も引き続き、よく噛んで味わって食べることを勧める働きかけが必要です。

⑤食生活改善推進員※⑥の増加



24年度と比較すると、減少しています。

今後は、推進員の活動の充実を図るために、研修会等の内容を見直すとともに、活動の場を見直します。

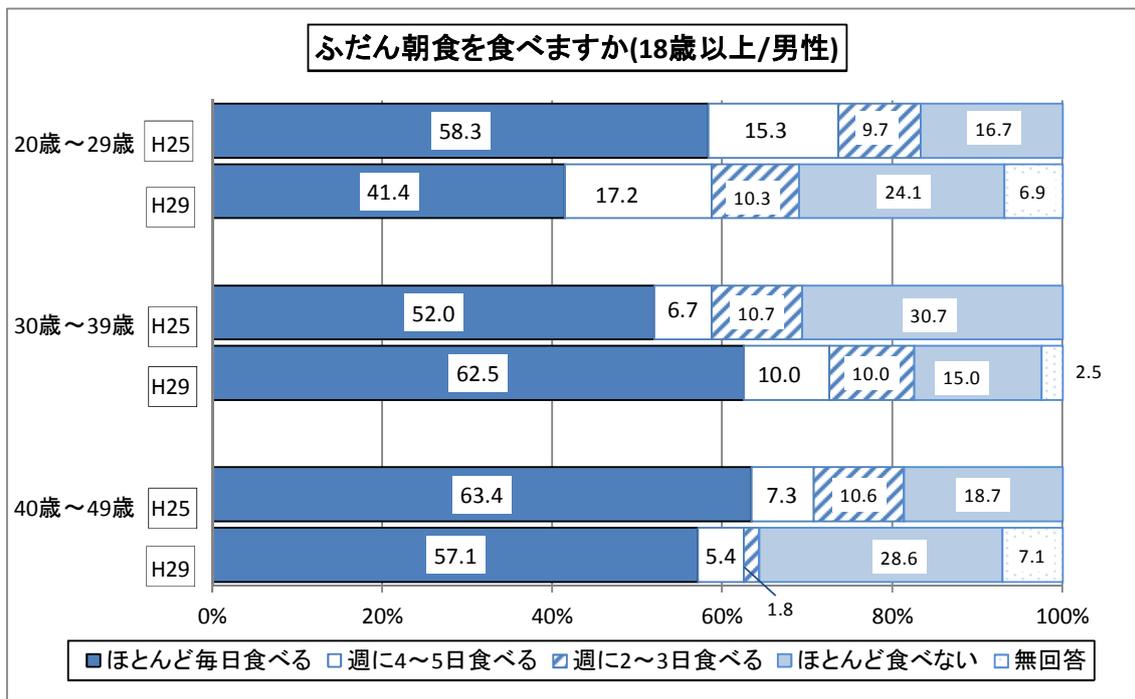
また、市民が若い世代から食に関心を持ち、食に関するボランティアを通じた仲間づくりができるような働きかけをしていく必要があります。

※⑤歯科保健と食育のあり方に関する検討会報告書：平成21年7月に厚生労働省より公表。

※⑥食生活改善推進員：食を通じた健康づくりのボランティア。本市では、「養成講座」を修了後に入会し、地域で様々な活動を行っている。

(2) 基本目標2：「食」の楽しさを身に付けよう

⑥朝食を食べない人の割合の減少

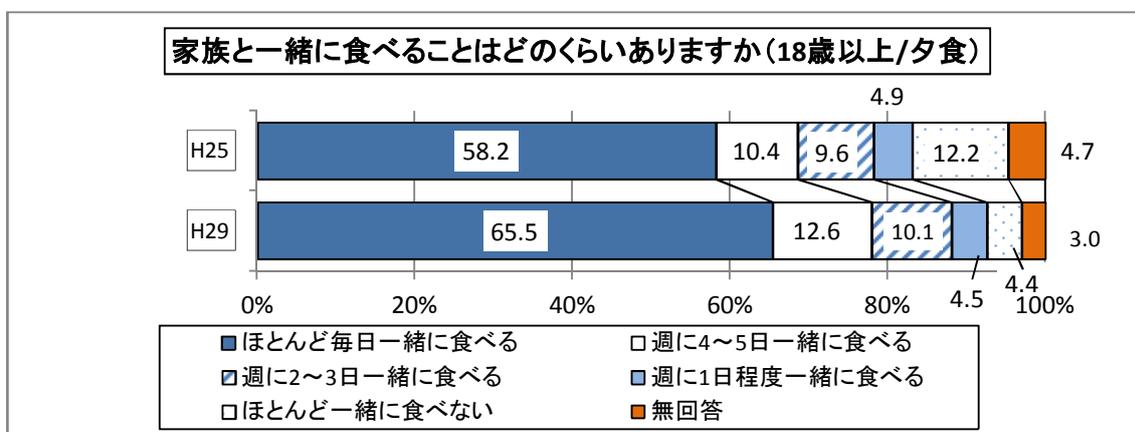
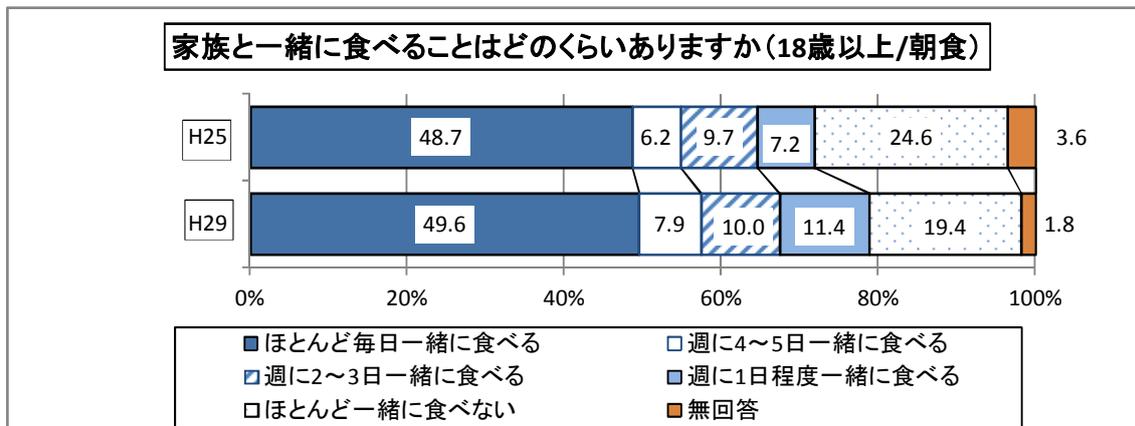


29年度は、20歳代が24.1%、30歳代が15.0%、40歳代が28.6%となっており、25年度と比較すると、30歳代を除いて増加しています。

朝食を食べない理由として、20~40歳代は働き盛りの世代であるために忙しく、朝食を食べる時間がない、夕食が遅くなるため朝食が食べられないということが多い傾向にあります。今後は、朝食の重要性や簡単な朝食の摂り方の工夫、夜遅い時間の食事の摂り方の注意点等、正しい知識の普及に努めていく必要があります。

⑦朝食又は夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数の増加

(朝食+夕食の週平均)

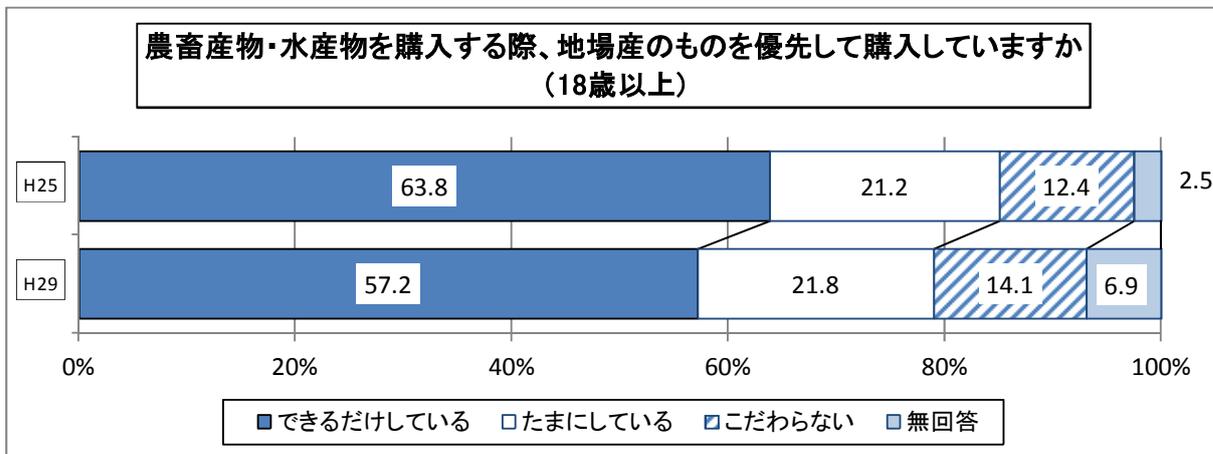


25年度と比較すると、増加しています。

しかし、近年のライフスタイルの変化により、家族内でも生活時間が異なる家庭が増加しており、食事時間が合わず、「共食」ということが難しくなっている現状にあります。引き続き、「共食」の大切さについて啓発していく必要があります。

(3) 基本目標3：鹿児島県の「食」を味わい伝えよう

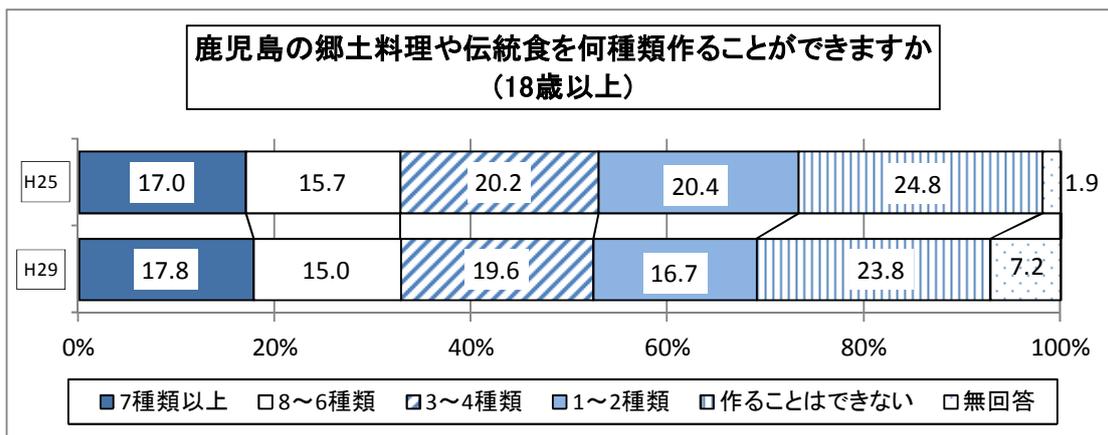
⑧地場産(鹿児島県産)の農畜産物・水産物を意識して購入する人の割合の増加



29年度は79.0%で、25年度の85.0%と比較すると、減少しています。

減少の原因として、農家の高齢化により生産量が減少し、身近に購入する機会が減っていることや、流通手段の発達により、遠方から運んできた農林水産物も鮮度が保たれており、おいしく食べられるということが考えられます。少しでも地場産のものを食べてもらえるように、目立つところに商品を陳列したり、直売所のPRなどを推進していく必要があります。

⑨鹿児島県の郷土料理・伝統食を1種類でも作ることでできる人の割合の増加

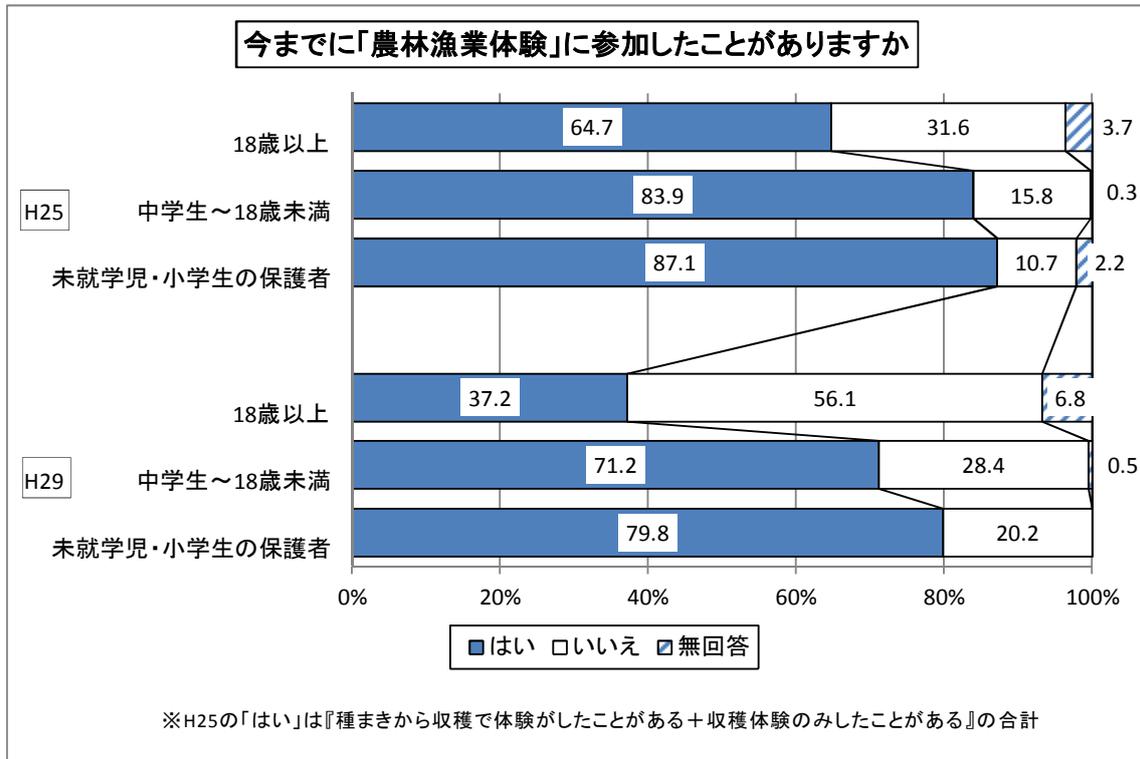


29年度は69.0%で、25年度の73.3%と比較すると、減少しています。

核家族化が進み、郷土料理の作り方を家庭で引き継ぐということが、難しい現状にあります。今後も継続して郷土料理教室等を開催し、作る機会を増やす取組を推進していく必要があります。

(4) 基本目標4：「食」を体験しよう

⑩農林漁業体験を経験した人の割合の増加

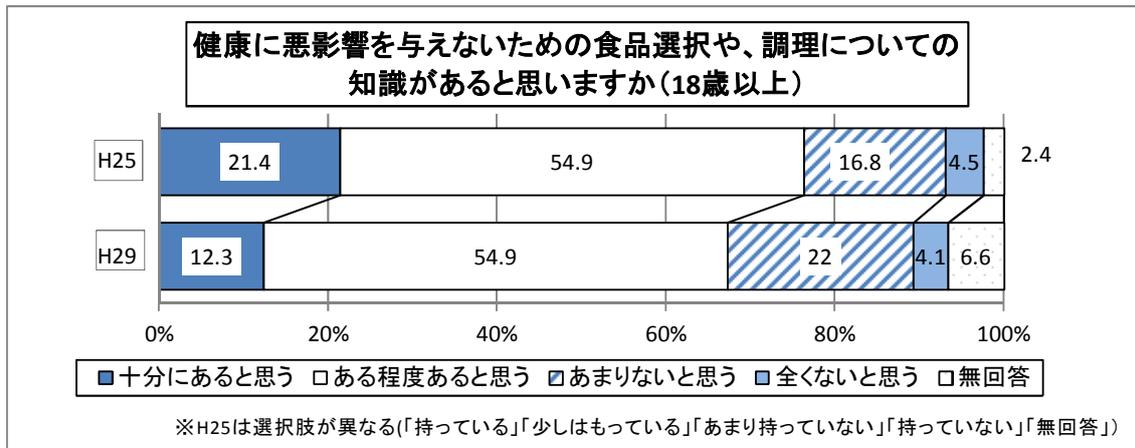


25年度（上記※）と比較すると、全世代で減少しています。

今後は、多くの人に参加できるような農林漁業体験活動の場を設けるとともに、簡単、手軽にできるような情報を提供する等、体験するきっかけ作りをしていく必要があります。

(5) 基本目標5 : 「食」について知ろう

⑪食品の選択・調理方法について知識のある人の割合の増加



29年度は67.2%で、25年度の76.3%と比較すると、減少しています。

今後も引き続き、食品の選び方や調理法等の正しい知識を普及させ、自らの食を自らの判断で正しく選択できる力を身に付けるための働きかけが必要です。

2. 目標値一覧

目標項目		現状値 25年度	評価 29年度	目標値 30年度	
1	食育に関心を持っている人の割合の増加	80.6%	69.5%	90%以上	
2	「食事バランスガイド」等を参考に食生活を送っている人の割合の増加	56.2%	49.6%	65%以上	
3	メタボリックシンドロームの予防や改善のための取組を継続して行っている人の割合の増加	24.5%	25.2%	30%以上	
4	食事をよく噛んで味わって食べる人の割合の増加	31.8%	41.4%	40%以上	
5	食生活改善推進員の数の増加	431人 ※Ⅰ	334人 ※Ⅱ	500人以上	
6	朝食を食べない人の割合の減少	20歳代の男性	16.7%	24.1%	15%以下
		30歳代の男性	30.7%	15.0%	15%以下
		40歳代の男性	18.7%	28.6%	15%以下
7	朝食又は夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数の増加(朝食+夕食の週平均) ※Ⅲ	週8.8回	週9.6回	週10回以上	
8	地場産の農畜産物・水産物を意識して購入する人の割合の増加	85.0%	79.0%	90%以上	
9	鹿児島の郷土料理・伝統食を1種類でも作ることできる人の割合の増加	73.3%	69.0%	85%以上	
10	農林漁業体験を経験した人の割合の増加	18歳以上	64.7%	37.2%	85%以上
		中学生から18歳未満	83.9%	71.2%	95%以上
		未就学児・小学生	87.1%	79.8%	95%以上
11	食品の選択・調理方法について知識のある人の割合の増加	76.3%	67.2%	90%以上	

※Ⅰ 24年度実績値

※Ⅱ 30年度実績値

※Ⅲ 「ほとんど毎日」を週7回、「週に4~5日」を4.5回、「週に2~3日」を2.5回、「週に1日程度」を1回として、朝食・夕食ごと(設問ごと)に、当該人数を掛け、合計したものを全体数で割り、朝食と夕食の回数を足して週当たりの回数を算出する。